

フォトエッセイ #197

# 啄木のあしあと

明治40年5月からのわずか4か月  
啄木がもっとも光輝いた時  
彼の残した足跡は  
函館の大きな大きな財産

猛暑の中  
駆け足でそのあしあとを  
辿ってみました

2025.8.24  
島田祥生



宝来町で電車を降り  
「あさり坂」を登ってきました

この突き当りを左に少し  
啄木が4か月を過ごしたところです

# 石川啄木居住地跡

「函館の青柳町こそかなしけれ 友の恋歌 矢ぐるまの花」  
「わがあとを追ひ来て 知れる人もなき 辺土に住みし母と妻かな」

薄幸の詩人石川啄木が、家族を迎え、住んだ青柳町の借家跡は、この付近の路地にある。岩手県渋民村(現盛岡市)で貧しい暮らしを味わった啄木は、明治40年(1907年)5月初め、一家離散を余儀なくされた。

啄木が新天地を求め、妻節子と長女京子を盛岡の実家・堀合家に預け、母カツは知人宅に託して妹光子だけを伴い、津軽海峡を渡り函館に着いたのは5月5日のことである。(妹は、そのまま小樽の義兄のもとへ向かった。)

啄木を温かく迎え入れたのは、函館の文学愛好家グループ「首蓓社」の同人達であった。

啄木の日記に「四十頁の小雑誌なれども北海に於ける唯一の真面目なる文芸雑誌」と記された文芸誌「紅首蓓」は、のちに啄木が主筆となり、一切の編集を任されることとなる。その首蓓社は、この地より左手の青柳小学校の上辺にあり、一時啄木はそこに仮住まいをしていた。

7月7日、啄木は盛岡から妻子を呼び寄せて、この付近の路地奥にあった借家に落ち着き、8月には母と妹を迎え、新家庭づくりにかかるが、不幸にも8月25日夜、大火が発生し、勤めていた弥生尋常小学校や函館日日新聞社が焼けてしまった。

職場を失った啄木は、9月13日新たな職を求めて札幌へと旅立ち、函館での生活は4ヶ月余りで終わりを告げたのである。

函館市

## Site of Ishikawa Takuboku's residence

彼が主筆を務めた

文芸誌「紅首蓓(べにごまやし)」の第8巻の原稿も

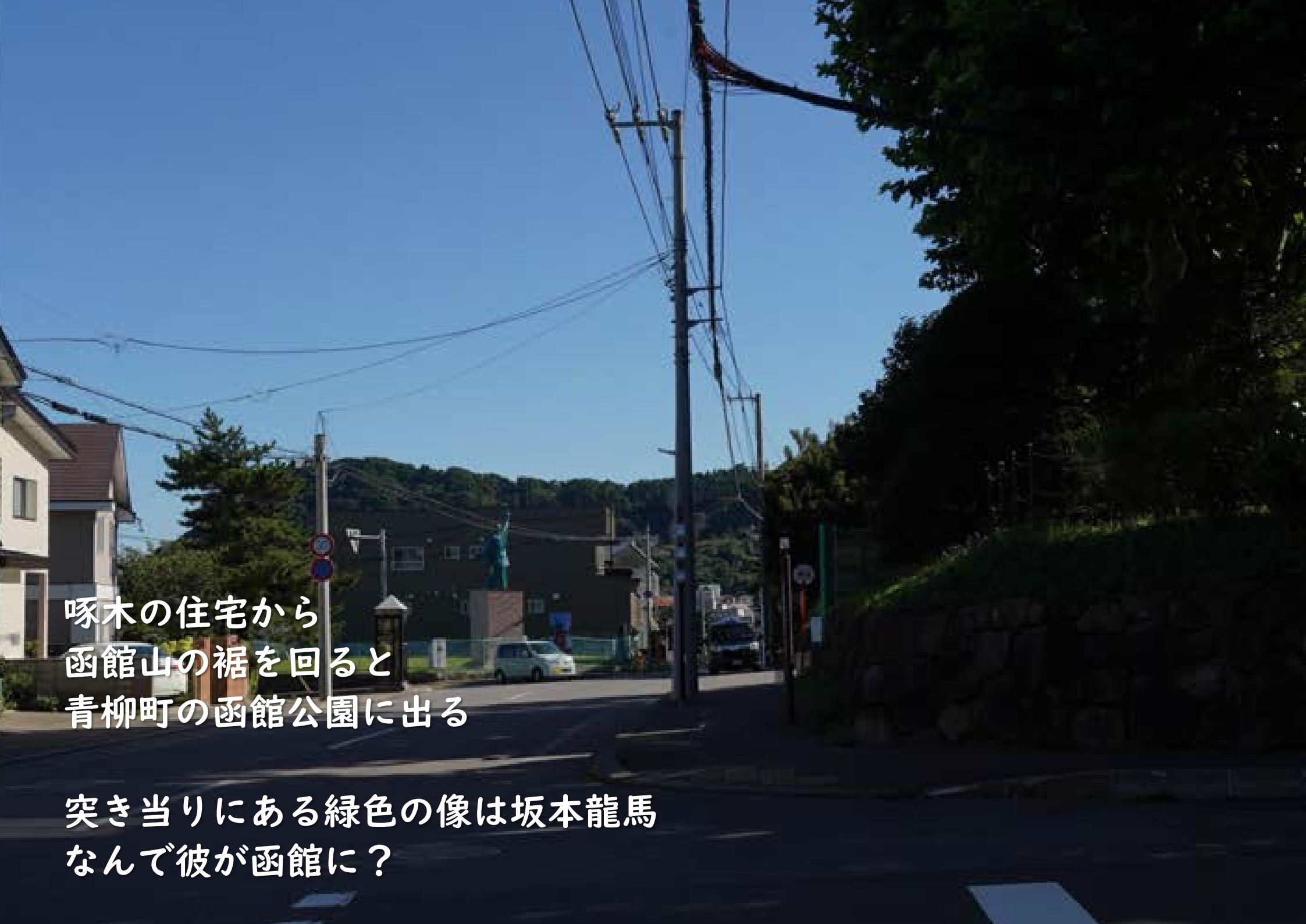
函館毎日新聞の社屋とともに灰燼に帰し

失意の底に

それも函館を去る引き金になったようである

The unhappy poet Ishikawa Takuboku once lived in Hakodate. After experiencing hardship in his hometown Shibutami-mura (Morioka) in Iwate Prefecture, Ishikawa sought a new start here, leaving his family behind. He arrived on May 5, 1907, with his wife and daughter, who continued to live in their hometown. The members of the local literary group, Bokushukusha, warmly welcomed him. He wrote in his diary about its magazine, "It is a small magazine, but it is the only serious literary magazine in Hokkaido". He soon became its editor. The Bokushukusha was located to the left of Yayoi Elementary School, and he temporarily lived in the building. He found work as a substitute teacher at Yayoi Elementary School and as a freelance reporter for a local newspaper. On July 7, his wife and daughter arrived, and they settled in a rented house in a nearby alley. His mother and younger sister had only recently arrived on August 25 when a large fire destroyed part of the city. Both of his workplaces were lost, and he became unemployed. He stayed in Hakodate for 3 months before leaving for Sapporo to find a new job. His life in Hakodate ended after only about four months.

CITY OF HAKODATE

A street scene in Japan. On the left, there are modern houses. In the center, a road leads towards a hillside. A utility pole with many wires is prominent in the foreground. On the right, there is a steep, grassy hillside with a stone retaining wall. In the distance, a green statue is visible on a pedestal. The sky is clear and blue.

啄木の住宅から  
函館山の裾を回ると  
青柳町の函館公園に出る

突き当りにある緑色の像は坂本龍馬  
なんで彼が函館に？



函館公園に入って  
突き当り右の階段の傍に  
かの歌碑がある

「函館の青柳町こそかなしけれ  
友の恋歌矢車の花」

友に來た恋文を見せあうほどの  
打ち解けた付き合いを謳歌した

# 石川啄木の歌碑

この歌碑は、啄木の青春のあしあと、青柳町時代を記念して昭和28年(1953年)4月に建立された。

全国に数多く点在する啄木歌碑の中でも一番美しいできればえといわれるこの歌碑は、啄木の自筆を集字拡大したものであり、エキゾチックな風情とロマンをもつ街・函館をうたった歌として、広く市民に愛誦されている。

薄幸の詩人、石川啄木が函館に逗留したのは、明治40年(1907年)5月から9月にかけての僅か132日間にすぎない。この間、文芸同人苜蓿社の諸友に囲まれ、文学を論じ、人生を語り心安らぎつつも、自らの若さと夢を思い悲しんだ。



●モニュメント

石川啄木歌碑

函館市青柳町の函館公園を正門から入ると、すぐに小さな山(通称スリバチ山)があり、そのすそに石川啄木の歌碑がある。

函館の

青柳町こそかなしけれ

友の恋歌矢車の花

の歌が、啄木の筆跡を拡大して彫ってあり、裏面に次のような宮崎郁雨の碑文がある。

「石川啄木が首宿舎に迎えられて青柳町に住んだのは、明治四十年五月から九月に至る短い期間であったが、此の間の彼の生活は、多数の盟友の温情に浸り、且久しく離散して居た家族を取り纏める事を得て、明るく楽しいものであった……」この碑は、昭和二十八年、丸井今井百貨店

が建立した。啄木が住んだ家は、この公園を出て北の方へほんの少し行った場所にあったのだから、おそらく公園内も、ずいぶん散歩したのではあるまいか。文学を通しての友人たちも多くは青柳町にいた。



はこだて歴史散歩



篇誌は  
艦船と  
歴史

「はこだて歴史散歩」  
北海道新聞函館支社が  
連載したものを抄録した  
本が手元にあった

今回そのうちの数項を  
引用させてもらいました

暑い暑い！！  
ものすごく暑い！

函館公園の噴水は大人気





函館公園を出て  
青柳町の電停から谷地頭終点に  
この道の突き当りを左折して  
啄木一族の墓へ

前回出会えなかった 8002 号車  
元気でした

A paved path leads through a cemetery, flanked by large, leafy green trees. On the left, several tombstones are visible, some with ivy growing on them. The path curves slightly to the right in the distance. The scene is bright and sunny, with shadows cast on the path.

だらだら坂をあえぎながら登ると  
啄木一族のお墓が見えてきた

この道を200mほど行くと  
立待岬に出る

石川啄木一族の墓

●モニュメント

啄木一族の墓

函館山の一方は立待岬で、眺めのいい所がある。この岬の近くに啄木一族の墓がある。啄木夫妻、両親、それに三人の子供が



眠っている。潮騒がきこえ、夏になると、コバルト色の海が眼下にまばゆくのぞまれ、放浪を愛した啄木に、ふさわしい場所である。墓には

東海の

小島の磯の白砂に

われ泣きぬれて蟹とたはむる

の歌が彫られてある。この歌は墓に彫るにふさわしい。啄木の短い一生をこの歌ほど巧みに要約しているものはないからである。

東海とは、日本のことだろう。彼の近代的自我や自意識は、常に誤解され、当時の人たちより一步先を歩いていた彼は、白砂で蟹と戯れるしかなかったのだらう。

大正二年（一九一三年）三月、節子夫人の希望で啄木の遺骨は函館に移され、以後ずっと函館に眠っているが、実に風土と人間のかかわりあいとは運命的なものである。



啄木一族の墓の後ろに  
啄木の大恩人の  
宮崎郁雨のお墓と歌碑がある

いつまでも  
啄木に寄り添っているようです

宮崎郁雨の歌碑



郁雨は歌人としても、文学者としても、並の人間であり、一流ではない。しかし、啄木を発見したというだけで、彼は十分に自分の役割を果たした。彼は啄木という天才に援助を惜しまなかった。その啄木のそばで、下手な歌をつくりながら、悪びれるところは何もなかった。人柄が良くなければ、決して出来ないことだ。

蹣跚ランランと夜道をたどる淋しさよ

酒はひとりし飲むものならず

の歌碑が啄木一族の墓と並んでたっている。ゲーテとシラーの像かもしれぬ。ただ、郁雨はシラーのような才能を持たなかった。

「……酒はひとりし飲むものならず」彼は友愛の精神に富んでいた。この歌がそれを物語っている。そして、ここでいう酒とは、文学のことであり、人生のたとえである。

「啄木の墓」から彼がこよなく愛した大森浜を望む

山並みの右に

こぶが三つある「三森山」が分かりますか

その手前の海岸あたりに大きな砂山がありました

砂山の砂に腹這い初恋の・・・



さて

その砂山の近くにある啄木小公園に向かいます

坂を下りながらふと目を上げると

駒ヶ岳が





ここから大森浜を歩くのは大変  
途中まで電車に乗ることにしました

来たのは何と  
これも前回会い損ねた連接車の 9603 号車



電車を降りて歩くことしばし  
だんだん日が傾いてきました

日があるうちに着いた！

啄木には  
函館山と  
大森浜がよく似合う

手前の碑には  
西条八十が啄木にささげて作詞した  
詩が刻まれている

眠れる君に捧ぐべき  
矢車草の花もなく  
一人佇む五月寒  
立待岬の波静か  
おもひ出の砂ただ光る

眠れる君に捧ぐべき  
矢車草の花もなく  
一人佇む五月寒  
立待岬の波静か  
おもひ出の砂ただ光る



海峡を望む公園に咲き誇る  
ハマナス

花の季節はそろそろ終わり  
赤い実が夕日に映える

●大門・海峡  
啄木小公園



啄木は放浪を愛した。放浪とは、理解されない自意識を慰める唯一の手段である。啄木の放浪は函館から始まったと考えることができる。

そういう意味で函館は啄木の文学の基盤である。彼が函館で愛したものは、大森浜の海と砂山だ。

「砂山の砂に腹這い初恋の痛みを遠く思ひ出づる日」

これは彼の代表作で、官能的な傑作だ。啄木には官能の世界もあるが、とかく忘れられがちで、不満である。

啄木の座像はいい所に立っている。ここから見る海と函館山は情緒があってすばらしい。しかし、この小公園にある座像の表情は、啄木を誤解している。

潮かをる北の浜辺の

砂山のかの浜藪上

今年も咲けるや

この歌が座像の下にあるが、この歌は、「初恋の痛み」に遠くおよばない。建立は昭和四十三年四月。

なかなか手厳しいですね  
でもそれだけ  
「いい歌」が多い  
ということでしょう

赤の傍線は  
前の持ち主が  
引いたものです



啄木が  
泣きながら  
カニと遊んでもらった砂浜

それはそうと  
ここからの函館山も  
いいですねえ！！！！

An aerial photograph taken from an airplane, showing a vast coastal landscape. In the foreground, the dark blue sea is visible. Beyond it, a densely populated city stretches along the coast. To the left of the city, there are green, hilly mountains. The sky is filled with large, white, fluffy clouds. The tail fin of the airplane is visible in the top left corner.

羽田に向けてぐんぐん上昇しています  
いい席に着きました  
いい眺めです  
啄木の墓  
友の恋歌の函館公園  
住居跡地  
大森浜  
啄木公園は見えませんでした  
満足満足！！！！

函館公園

住居跡地

啄木の墓

大森浜

啄木小公園⇒